伊香保大会が終わって
「気持ちよさ」

2016.9.10

群馬/川島滋弘　qwydc2855@yahoo.co.jp

■年を取ったのかなぁ…

伊香保大会が終わってすぐの碓井安中の特別支援主任会でのおりぞめ講座，その後の宇都宮の会，そしてたの障の夏合宿と，この夏はこれまでにないくらい毎週のように出かけていました。奥さんからの無言の圧力を感じながら新学期を迎えています。

「大会の総括をする」という話が持ち上がったので，ボクなりに何かまとめようと思っていたのですが，なかなか気持ちが向いていきません。先日送られてきた善朗さんの『風のたより』の「疲労度」という資料ではないですが，気づかないうちにやはり年を取っているのかもしれません。（以下，引用）

…しかし、心配な側面が全く無かったわけではありません
それは、スタッフや参加者の高齢化の問題です
高齢化…といっても、80 歳 90 歳といったレベルではなくて
せいぜい 50 歳代半ば以降の「意識しにくい高齢化」です
実は、２年前に大学の同窓会に出席したおり
トイレに立った女性参加者が突然意識を失って倒れ
そのまま救急車で搬送される、という出来事がありました
幸い大事には至りませんでしたが、病気不参加の人も多い中
当時 56 歳だった自分が置かれた年齢的現実を

しみじみと実感させられた出来事でした
ほんの数年前には考えもしなかった出来事なのですが
しかしこれからは、その「ほんの数年」というのが大きい
今までの「数年」と、これからの「数年」は違うのです
もしもあなたが「数年前と同じ仕事をした」のなら
あなたは確実に「数年前よりも疲れている」のです
もしもあなたが「数年前と同じ量の酒を呑んだ」のなら …（笑）

もちろん、〈疲労度〉なんて人それぞれなのですが
でもだからこそ、自分の身は自分で守ってほしい
超えてしまうと危険な「限界点」は必ずあって、しかも
そのレベルは歳を重ねるごとに、確実に下がっているのです
ひどい事故や病気など、大事に至る前の段階には、しばしば
その「兆候」としての小事が起きるものです
その「サイン」を見逃さず、そして、もしも見つけた時には
一歩でも半歩でも、これまでより身を引く勇気を持ちましょう
そこに長く関わり続けたいのであれば、なおさらです
善朗みたいに、いっぺんに全てを放り出す必要はないけれど
少しずつでも「若い人たちに委譲していく」とかね
そうして、自分の心と身体を、あなた自身で守ってほしい
たとえスタッフであれ、…いや逆に
「刈谷のスタッフ」であればこそ
そんなことにも率先して取り組む価値はあると思うのです
みんながみんな、そうである必要はないけれど
一部には、そんな人間があからさまに居てもいい
「役割」は、他の誰かが引き継げますが
「その人」は、その人限り、他の誰にも引き継げません…
（引用，ここまで）

お互い気をつけましょうね。

■何を総括するのか？

さて，夏の大会は，それなりに参加者のみなさんからの評価もよく，「成功の裡に終わった」と言ってもよいのでしょう。

栗原さんが今日のためにレジメを作ってきてくれたと思いますが，「次につなげてこそ伊香保大会が終わる」のだと思います。

あらためて「どんな目的意識をもって」「何を実験したか」と問い直してみると，大会当日を迎えるまでのやり取りの中で生まれてきたいくつかのことが挙げられます。

① 資料代に関する提案
② ラウンジコーナーの設置（売り場と本部の一体化）
③ ガリ本ダービーの復活
④ 実行委員会の組織に関すること

の４つが今パッと思い出されます。その他，平野さんへの「実行委員会賞」や「ブラボー券」の採用，「おたのしみ分科会の設定」などもあります。これらのうちのどれがうまくいって，どれがよくなかったか，何を次の長崎に引き継ぐかは，この場でみなさんからいろいろ意見が出ることでしょう。

だからボクはそれを聞きながら「うん，確かにそうだったね～」とか「いや，それはちょっと違うんじゃないかな」とおいしい料理とお酒のついでに口をはさむことと思います。

でも，実際に「これこそ次に引き継ぐべきだ」と決めるなんてことはボク一人ではできそうにありません。

■個人的な思い

それというのも，日が経ってしまって，あの大会総括の書き込みをしていたころの熱さが自分の中に湧いてこないからなのかもしれません。結局どれもみんな小さなことのように思えてしまう今のボクがいます。

しかしそれは「もう〈過去のこと〉として自分の中で解決してしまったからだ」というわけではありません。大会が伊香保に決まり

そうになった頃に始まり（いや，もっと前からか？），２月の竹内さんを迎えた会で，より自分の中で明確になってきたことがあるのです。それがいまだにずーっと心の中で引きずっているのです。

それは「大会をやる」とか「参加者の皆さんに喜んでもらう会にする」とか「仮説実験授業に誠実に対応する」などという大袈裟なことではなく「ボクはこうありたい」というまったく個人的な生き方の問題のような気がしています。

だから，もちろんボクのように思わない人がいても当然だし，それを他の人に強要しようなどという思いはこれっぽちもありません。

う～ん，なかなかうまく言えません…。

心円祭の報告に書いた文章を再度ここにあげることで許してもらうことにします。

（ここから）

■あらためて

これまでにも，心円さんのところを使って小さな会や少し大きな会を開いてきたことがあります。きっかけは全く言い出しっぺの人の「ねえねえ，今度〇〇さんを呼んで会をしたいのだけど…」の一言で始まりました。

そして，それらの会は「よし，それ乗った！」とばかりに，みんなが勝手に動き出してくれたおかげで，実現できたことでした。

昨年末の，前橋で犬塚さん大黒さんの《熱はどこにたくわえられるか》の会も，言ってみれば僕や栗原さんと大黒さんの間で交わされた個人的なやり取りから始まった会でした。でも，結局地元群馬のみなさんの参加をいただき，無事に会を終えることができたわけです。

心円祭は，それに比べると少し大きな会です（とは言っても，せいぜい 50 人規模を想定していますが…)。ボク個人の「やりたい」というわがままだけでは会を運営できそうにありません。齢が齢だけに，以前のように「ワァ～」っと一気に動き出す体力だけでなく，気力を

生みだすのにも時間がかかりますし，その思いを持続して会を実施するのも難しいかもしれないのが正直なところです。

一昨年の大黒さんの講演の中で「みんなはじめは一人。だけど，多くの人たちのおかげで夏の大会ができた」というお話がありました。それとまったく一緒です。

大まかな構想はできてきましたが，まだまだ粗削りです。ご意見いただけるとありがたい。実動部隊として一緒に運営してくれると最高ですが，アイデアだけでも構いません。

■自分が楽しむために〈まわりを巻き込む〉ということ

「心円祭」は伊香保大会とは別物なのですが，先日の会の席上でみなさんからこころよくご協力をいただける旨の返事をいただき，大変ありがたく思っています。伊香保大会へ向けてその弾みつけに「心円祭」も盛り上げてくださるとのこと。大変ありがたいです。

先日の「たのしい運営組織を考える会」で夕食後の一服をしながら，ボンヤリと思ったことがありました。

「大会」から比べれば「心円祭」は小さな企画です。しかも，ボク個人（科学の碑サークルメンバー？東京の荒井公毅さんらから？）の発案で始まったものなので，「大会を運営する」という見地からは場違いな感じもします。

ですが，会を催す，つまり「あらたな運営組織を提案する」ということでは非常に関連が深いので，先日の会はとても意義深いものがありました。自分のフェイスブックにも書き込んだのですが，その時に感じたことをここに再録させてもらいます。

「組織」なんて言葉はまだ僕には馴染めないけれど，自分がやりたいと思った楽しみ事を始める時には一人の力では実現できそうにないこともある。

どうせなら誰かを巻き込んで大勢で楽しみたいと思う。

巻き込まざるを得ない仲間，進んで巻き込まれてくれる仲間がどれだけいるか？

そんな仲間に気持ちよく巻き込まれてもらえるような，そんな運営を考えるのは楽しそうだ。

なあんて，ちょっぴり思索に耽ったのでした（笑）。

あらためてみなさんにお願いします。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

板倉さんは仮説実験授業研究会を立ち上げる時，竹内三郎さんに直々に頭を下げて「どうかキミに協力してもらいたいんだ」とおっしゃったそうです。

そうしたら，ぼくなんか土下座しなくちゃなりません（笑）。

まあ，気心知れた皆さんのことですから，かえってそんなことをしたらおかしなものになっちゃいますよね。まあ，よろしくお願いしますね。

（ここまで）

■自分はどうなんだ？　ゴメンナサイ。

「気持ちよく巻き込まれる」――これって，〈巻き込む〉方の問題もあるけれど，当然のことながら〈巻き込まれる〉方の主体性だって問題になります。だから巻き込まれるのを覚悟でやるからには，ああだこうだ言っていないで，自分から楽しく気持ちよい方向に動けばいい。

そういった意味ではこの伊香保大会は自分なりにやれることはやったなと満足できるものでした。

しかし，そうは言っても〈巻き込む側〉として何かをやるとなったら，自分の主体性を問題にするのと同じくらいに巻き込まれる仲間の主体性だって考えないわけにはいきません。

教室の授業だってそうでしょ。たとえ仮説実験授業の授業書をやっていたって，ボクも子どもも気持ちよく過ごせないようなら，それは

もはや仮説実験授業とは言えない。理想の授業ではないということ。

まあでも，ボクなんて授業書をやっているときの方が子どもを怒鳴りつけることが多いっていうのも事実なんだけど(笑)。

「子どもも自分もお互いに気持ちよい時間を過ごす」これが一番の目標。だから，こう見えたってボクなりにその目標を達成するためにかなり子どもに気を遣っているんですよ（あとでそっと呼びつけてお菓子を食べさせたり(笑)…)。その瞬間の気持ち悪さを払拭してもらうための心配りはしているつもり。

でも，大人相手の時にはついつい忘れがち。そんなことを言ったらヒヤヒヤもので自分の首を絞めるようで言い出せないのだけれど，ついこの間の「たの障の夏合宿」だって，知らないうちに誰かの気を悪くしていたかもしれないのです。その自覚もちょっとはあるのです。

まあでも，人間，感情の生き物だからそういうごちゃごちゃしたことがあるのは当たり前なんだけど，許してもらうしかないです。「こんなボクのせいでアナタを気分悪くさせてゴメンナサイ」ってね。

だから，この場を借りてそういった方たちに謝っておかなくてはいけないですね。ごめんなさい。

だいぶ脱線しました。

伊香保大会を終えるまでの日々は「気持ちよさ」という点においては，正直なところボクにとって不満の残るものでした（その原因は何なのか？　それは一人一人が自分の中で考えればいいこと。そして次の自分の行動に反映させていけばいいことなんだろうな…)。

これからの自分の行為の束が，巻き込まれる仲間にどう映るか。それを意識していかないと，いつの間にか自分の感じた気持ち悪さに鈍感になってしまうかもしれません。

かと言って，他人の評価の影におびえてばかりいたら何もできなくなってしまうから，あまり意識しすぎることなく自分のやりたいように動くのが基本です。それをお互いに自由に言い合える仲間がいてこ

そ楽しさが広がっていくのだと思います。仲間のありがたさというのはそういうところにあるのでしょう。

もう一つだけ，気になっていることがあります。これがハッキリしないままだと，ボクはそれこそ気持ちよく伊香保大会を終えることができないのです。

それは平野さんが作った大会記念本の支払いについてです。実行委員会として買い取ったわけですが，あの金額が適正価格であるのかどうか？　ＭＬ上でも少しばかり議論が持ち上がりましたが，この場を使ってみんなの総意で「エイヤ!」と決めてしまった方がいいように思っています。

ということで，結局時間切れでいつものように「カワシマの文章は何を言いたいのかハッキリしない」まま終わりにします。

これもボクなんだから仕方ありません。ボクなりの夏の大会の総括として記しておくことにします。　　（おわり）